松江が生んだ美術史家・相見香雨の没後五〇年を記念し、シンポジウムと展示会を開催します。相見は生涯独学の人でしたが、古美術の素養形成にあたっては、家系と地域文化が深く関わっていたと考えられます。そのルーツをたどってみましょう。

相見香雨

本名　繁一（はんいち）　一八七四―一九七〇

明治七年一二月一日、松江市魚町の商家・相見家（野波屋）の長男として生まれる。十代で両親とも没し、親戚にあたる岡崎運兵衛方に寄寓。修道館を経て島根県尋常中学校へ進学、ラフカディオ・ハーンに英語を学ぶ。東京専門学校（現・早稲田大学）文学科撰科卒業後、帰郷し『松陽新報』編集者となる。明治四一年、審美書院に入社し、美術書の史料収集と調査にあたる。明治四三年、日英博覧会出店のため渡英し、一年半滞欧。帰国後、芸海社（後に精芸出版に合併）で美術書編纂にあたり、後に日本美術協会嘱託となる。生涯在野の美術史家として実証的研究を続け、琳派・文人画・絵本画譜を中心に多数の編著書を発表した。昭和二七年、文化財保護委員会美術工芸部門専門審議会委員に就任。昭和三六年、紫綬褒章、勲四等旭日小綬章受章。昭和四五年六月二八日、東京の自邸「飛鳥山房」で没、九六歳。

昭和 26 年、相見香雨 76 歳
関家提供

【第一章】父・相見文右衛門と祖父・森脇忠兵衛

相見香雨の祖父は、松江白潟の豪商・森脇三家のひとつ古森家の森脇忠兵衛十世元照（号松陵）で、江戸末期に白潟大年寄をつとめました。父・文右衛門はその三男で、幼名は庫三郎、諱は敏修、字は允叔。一八歳で相見家へ養子入しました。淞雨と号し、書画に優れ、胡鉄梅はじめ清朝詩人来松の際は世話役をつとめました。松陵と同じく篆刻を最も得意とし、印譜『蘆花浅水処印叢』の題辞には「龍手」と称えられています。

相見文右衛門刻　三条実美印
「実美之印」「梨堂」白文方印

胡鉄梅「蘆花浅水処之図」

『蘆花浅水処印叢』明治 24 年刊所収　九州大学中央図書館相見文庫蔵

【第二章】近代松江における漢詩文化

松江は江戸末期から明治大正期、さらには昭和前期にかけて、東京・名古屋と並ぶ漢詩創作の中心地でした。漢詩の伝統は河野天鱗や雨森精翁ら学僧・藩儒から、村上琴屋や横山大雪ら新世代へと受け継がれ、明治三六年には全国規模の漢詩結社「剪淞吟社」が結成され隆盛期を迎えます。こうした出雲漢詩壇の活況は士族層ばかりでなく豪商・豪農にも及び、機会あるごとに漢詩集が刊行されました。相見淞雨も雨森精翁門下であり、なかなか優れた詩を残しています。

雨森精翁の還暦を祝う出雲漢詩壇の人々
明治 15 年 5 月撮影
（前列左から 3 人目に雨森精翁、後列左から 4 人目に相見文右衛門）
『雨森精翁五十年録事』口絵　昭和 7 年刊

湖南信天吟社編
『碧雲一朶』
明治 12 年刊

【第三章】松江藩と豪商たちのコレクション

松江で〈コレクション〉といえば、まずは七代藩主・松平不昧による茶道具収集、そして彼が編纂した名物図説『古今名物類聚』が挙げられます。一方、松江藩家老・乙部九郎兵衛十代可時の中国絵画コレクションも、かつてはこれに劣らず著名であり、「乙部家蔵幅目録」は各地で筆写されました。相見香雨も「総門雲煙集」と題して翻刻紹介しています。明治期以降、これらは散佚してゆきますが、新たな所蔵者の顔ぶれからは、美術文化愛好の風土を受け継ぎ支えた町の人々の様子がうかがえます。

陶斎尚古老人『古今名物類聚』18 冊（松平不昧書入本）
寛政元年～ 9 年刊
島根大学附属図書館桑原文庫蔵

「雲州乙部家蔵幅目録」年不詳
島根大学附属図書館桑原文庫蔵

【第四章】美術史家・相見香雨の誕生

相見香雨が美術史家の道を歩むきっかけとなったのは、明治三九年頃、東京から審美書院主幹の田島志一が雲州松平家所蔵の不昧公名物撮影のために来松したことでした。約一ヶ月に及ぶ調査を手伝った相見は田島と懇意となり、「入社の予約」をします。明治四〇年、審美書院に入社し、『東洋美術大観』はじめ同社の代表的美術書において史料収集と調査を開始します。以後も作品と文献、現地調査を重視する実証的研究により、日本美術史に多くの新知見をもたらしました。

明治 43 年（1910）
日英博覧会出店のため
ロンドン滞在中の審美書院一行
（左端に相見香雨、右端に田島志一）

相見香雨「抱一上人年譜稿」
『日本美術協会報告』6 輯
昭和 2 年 12 月刊

相見香雨没後五〇年 記念シンポジウム

ZOOMを用いたオンライン形式で開催します。
参加無料（先着一〇〇名まで）

令和2年12月6日（日）
午後1時30分～4時30分

司　会：田中 則雄（島根大学法文学部教授）
　　林 みちこ（筑波大学芸術系准教授）

報告者：
①村角 紀子（桑原羊次郎・相見香雨研究会代表）
「十九世紀松江の地域文化と美術史家・相見香雨の誕生」
②要木 純一（島根大学法文学部教授）
「近代松江における漢詩文化」
③玉蟲 敏子（武蔵野美術大学造形学部教授）
「日本の近世美術史における
　　相見香雨の業績と現代的意義」

【参加方法】①②いずれかの方法でお申込み下さい。受付完了後、メールにて参加用の URL とパスワード、当日プログラムを返信いたします。

〈締切：12月4日（金）〉

①インターネット申込み専用フォーム
「相見香雨没後五〇年記念シンポジウム参加申込」
https://forms.gle/8Q31atUEmNwthvea6

②電子メール
桑原羊次郎・相見香雨研究会事務局
アドレス　kuwabara.aimi@gmail.com
　件名に「相見シンポジウム参加申込」、本文に「参加者氏名」と「返信用メールアドレス」を必ずご記入下さい。

※送信いただいた個人情報は本シンポジウムの目的以外には使用しません。